

Book Review



新インプラントオーバーデンチャーの 基本と臨床

磁性アタッチメントを中心に

田中譲治 著



Reviewer

前田芳信 Yoshinobu Maeda

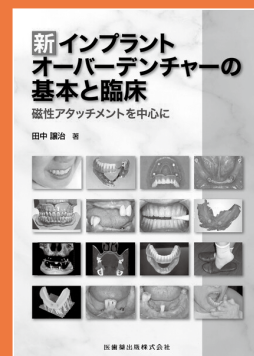
(大阪大学大学院歯学研究科名誉教授、招聘教授/
サハラ健育会オーラルケアステーション本町歯科院長)

A4判, 200頁

カラー

定価(本体 18,000円+税)

医歯薬出版刊



日本口腔インプラント学会や磁性アタッチメントの研究会を通じて永年親しくさせていただいている田中譲治先生がインプラントオーバーデンチャー(以下IOD)の著書を出版されると聞いて、どのような内容になるのかと興味津々で待ち受けていたのであるが、ようやく読ませていただくことができた。田中先生はすでに多くの成書や論文を書かれているので発刊まではスムーズに進行したと思うが、それでもできあがった本書をみると並大抵ではこのような書籍はできないはずで、いまさらながら改めてここに田中先生の豊富な知識、臨床経験さらに探求心の旺盛さに対して敬意を表する次第である。

2002年のMcGillのコンセンサス以来世界的に注目されるようになったIODではあるが、当時わが国のIODの利用頻度は欧米諸国に比べ低かった。その後徐々に頻度は増加してきてはいるが、適応となる症例の数に比べれば決して多くない。その理由として

は、田中先生が書かれているようにオーバーデンチャーに関するわかりやすいテキストが少なかったことも一因であろう。

またオーバーデンチャーそのものを、抜歯ができない天然歯根を残し義歯を製作するための緊急避難的なもの、あるいは全部床義歯に移行する前段階のもとして理解し、顎骨を維持し生物学的コストを軽減するものとは理解されていなかったからであろう。

本書の特徴として豊富な臨床例を通じてIODを適応する際の診査、診断、インプラントの数、位置の決定から、無口蓋義歯の製作、すれ違い症例への対応、シングルデンチャーでの注意点など多岐にわたって具体的に解説がなされている。

また副題にもある「磁性アタッチメント」の特性を生かした設計や、アタッチメント装着までの細かなテクニックと注意点が解説されているのも特徴だろう。またそのなかでも田中先生が考案された「MACシステム」に

も注目していただきたい。チェアサイドにおいて、磁石構造体をキーパー周囲のアンダーカットを掴んで義歯が外せなくなるなどのトラブルを避けつつ、キーパーと密着させて義歯に固定することができ、磁性アタッチメントの特性を発揮させるのに有効だからである。

磁性アタッチメントに関しては、我が国では現在もさらなる改良が続けられており世界をリードしている。近年ようやく「高齢者にやさしいアタッチメント」として欧米でも再認識されてきたのもそのおかげである。

本書では後半に超高齢社会、要介護社会を見据え、かつ急速に進む歯科治療のデジタル化についても、CAD/CAM、CT、3Dプリンター、口腔内スキャナーなどを応用した次世代の義歯製作法を通じて言及されている。

読者には近未来の有床義歯補綴の在り方を予測し、どう対応すべきかを考えさせてくれる機会となる書籍である。